

二〇一八年七月六日

梅雨しとど大和三山薄墨に  
ハングルの短冊も吊る星の竹  
あめんぼと小雨の水輪交錯す  
梅雨寒し待てど待てどもバスのこず  
門川に一と屯なる花菖蒲  
水玉のまろびし梅雨の石畳  
岨駈くる大蛇のごとき梅雨出水  
香久山の裾引くごとき青田かな

二〇一八年七月五日

ぐい飲みを切子に変へて冷酒汲む  
噴水の肩の力のふいに抜け  
園長がプール開きの河童役  
泣き相撲茅の輪くぐりて進みけり

二〇一八年七月四日

園児らの列なしかつぐ星の竹  
噴水のしぶきに躍る子らの声  
合歓咲くや駅舎に通ふ山の風

二〇一八年七月三日

一匹に大袈裟に焚く蚊遣り香  
雷遠く去りてより日矢差しにけり  
三間続き開けて仏へ青葉風  
空蟬の飴色に透く朝日かな

二〇一八年七月二日

鉄塔のみな影絵めく夕焼かな  
梅雨湿り百科辞典を断捨離す  
と見る間に道が早瀬に男梅雨  
浜つ子ら目指すは小島海開き  
大粒の雨さきがけてはたたがみ

二〇一八年七月一日

顔覆ふ競馬新聞三尺寝  
擦り終へし墨匂立つ星祭  
くぐり戸や旧家の土間の涼しかり  
水車小屋朽ちて久しや半夏生  
子燕らみな巢立ちたるしじまかな

二〇一八年六月三〇日

夏霧の晴れて牧場の牛近し

愛正

よう子

せいじ

智恵子

せいじ

ぼんこ

やよい

こすもす

たか子

小袖

智恵子

毎日句会みのる選・二〇一八年七月八日